正月二十日　與潘郭二生出郊尋春　忽記去年是日同至女王城作詩　乃和前韻

元豊五年四十七歳（一〇八二年一月二十日）

正月二十日、潘郭二生と郊を出て春を尋ぬ　忽ち記す去年の是の日同じく女王城に至りて詩を作りしことを　乃ち前韻に和す

東風未肯入東門　東風　未だ肯て東門に入らず
走馬還尋去歳村　馬を走らせて　還た尋ぬ去歳の村
人似秋鴻來有信　人は秋鴻に似て　来たること信有り
事如春夢了無痕　事は春夢の如く　了に痕無し
江城白酒三杯釅　江城の白酒　三杯　釅に
野老蒼顔一笑溫　野老の蒼顔一笑　温なり
已約年年爲此會　已に約す　年々　此の会を為さんと
故人不用賦招魂　故人　用いず　招魂を賦することを

【語釈】

釅…酢の味、茶の味の濃いことをいう。**蒼顔**…青黒く衰えた顔。**招魂**…都に居る友人たちが自分を呼び返すように運動してくれるには及ばないの意。

【通釈】春風はまだいっこうに東の門をくぐってこようとしないが、私は馬を走らせて、昨年たずねたこの村を今年もまた尋ねてきた。こうして、人はさながら秋にかえってくる雁のようにたしかにおとずれて来たが、世事はまったく春の夢のようになんのあとかたも残さない。長江沿いの街の濁酒は三杯で充分の濃さ、酒を与えたお百姓のあおく衰えた顔にニッコリ暖かい笑みが浮かぶ。これから毎年この会合をもちましょうと、もう約束していることだから、友人たちもどうか私の魂をよびかえす詩を作らないでいただきたい。

蘇東坡　近藤光男より抄出